■critique　文学／教育 3

辻本雅史著『「学び」の復権―模倣と習熟』を読んで

中村春作
Syunsaku NAKAMURA

■はじめに　I

今日、教育の現場は、かつてない困難に直面している。河上亮一『学校崩壊』以来、「学級崩壊」「学力崩壊」「大学崩壊」等々と、相似た題名を持つ教育論が陸続と世に出され、また我々も、「崩壊」といういささか過激なキャッチフレーズにさほど違和感を抱かないほど、教育をめぐる環境は急速に劣化している。評者に身近な環境（大学教育）においても、ここ数年来、特に（社会的常識は言うに及ばず）新入生の学力・知力の低下は著しくなり、そうした中での授業運営は、地方国立大学ではなかなか大変なこととなっている。そうした現状に対し、文部省主導の対応策は画一的かつ場当たり的であることを免れず、また、マスメディアの伝える「教育問題」はあいもかわらず「詰め込み教育」批判、「偏差値教育」批判、大学入試批判といった、スローガン化したステレオタイプの合唱を抜け出していないように感じられるのである。現在、文部省が強力に推進しようとしている中・高教育における「ゆとり教育」は、本当に実地に即した解決策なのか、実は生徒の自主性・選択に任せるという建前のなかで、ますます学力の低下を招き、結局、高等教育を行き着くところまで崩壊させてしまうのではないのか、という疑念も一方では強いのである。大学教育の現場においても、上からの圧力と横からの圧力、そしてそうした社会的圧力（空気）を、生真面目に、時として

過剰に意識するところからくる、パノプティコン（M・フーコー）的な自己検閲の体内化、形式化のなかで、多くの者が疲弊しつつあるといっても過言ではない。

そうした教育をめぐる現状の下、教育専門家から出される最近の論議の中で、「学習者中心」「学習者の視点で」云々の言い方がなされることが往々ある。評者が現在所属する学部も、例に違わず国立大学教育系学部再編・縮小の嵐の中で、新学部への移行を余儀なくされているのだが、その際、提案された改革案の中心的概念の一つとしてあったのも、「学習者中心」ということであった。ちなみに評者が新たに所属する改編新研究科・講座にも「学習」「文化」「開発」等々の名称が連語化して「学」の前につくこととなっている。そもそも「学習・開発」というのが、文部省の意向を先取りする形での自己防衛の気味があり、まずもってそうした政策的色彩の故に（それが全てではないにせよ）、「学習者中心」という言葉に少なからず躊躇してしまうのだが、私の本当の疑念はそこだけにあるのではない。「これからは教育者の視点ではなくて、学習者の視点が重要」などと、いかにもそれが時流であるかのごとく言われる際に、近代公教育のシステムのなかでそれを新たに言い出すことの意味、そこにあるはずの本来的な矛盾を一方で考えてしまうからである。良くも悪くも近代に制度として成立した公教育は、「教育者」が一定の均質な知識を「被教育者」に「与える」という、ある種の権力関係を前提として成立している。そのなかで、制度はそのままに、教育者の側が「学習者中心」といったことを言ったところで、それはいかにも世間に迎合する偽善的言辞であり、逆に言えば一種の責任放棄ではないか、という思いがするからである（そうした点で、教師が「金八先生」を理想とするのは教室の混乱、崩壊を招くだけであり、「教師」という「役目」を真に演じ切るべきだとする「プロ教師の会」河上亮一の発言の方が、私には率直に感じられる）。むしろ我々は、そうした言葉の言い替えで現状を突破しようとするより、もっと本質的な問題に立ち返るべきなのだ。すなわち、「公教育」や「大学」という制度等々、近代の歴史的産物が有効性を喪失しつつあるのではないか、近代公教育システムの耐用年数が尽きたのではないか、といった方向から考えるべきなのではないかということである。それはあるいは、自分自身の拠って立つ基盤の「自明性」を自ら切り崩すようなことになるのかもしれない。が、そこにしか真の解決策はないのだ。そして、（筆者が専門とする）思想史研究が介入すべき余地もそこにこそあるだろう。ここに取り上げ

る、辻本雅史著『「学び」の復権―模倣と習熟』は、まさに、そうした近代学校教育システムそのものの有効性に疑問を投げかけることから出発している点で、大いに共感される「教育論」であり、また、「学習者」という問題に、思想史研究として正面から対した分析として、評価されるべきものである。

> 学校教育で、本当に一人ひとりの個性を尊重する教育など原理的にできないのだ。原理的にできないシステムなのに、それをできるかのように唱えるから、教師は苦しみ、学校はますますおかしくなる。むしろ学校教育の機能をもっと小さく限定し、みんながそれぞれの場において何らかの形で子どもの教育に責任をもつよう、工夫する方が現実的ではないか。たとえば地域で、あるいは家庭で、そしてできるだけ企業でも、子どもの教育に対する責任について真剣に検討すべきなのだ。（二三八～九頁）

とする辻本氏の言はまったく正鵠を射ている。問題はもはや、「教育」を、制度としての「学校」から解放しなければならないところまで来ているのだ。そうした観点から、「学校社会から学習社会へ」の転換を論じた、品格ある「学習文化」論として、この著はある。

■ 江戸思想史の観点からなされる「学習文化」の再生論

教育論議の広範な活発化のなかで、上記のような、近代公教育そのものの自明性の解体、再構築という（再構築できるとする場合は）観点からなされる専門的研究が増えてきたのは、教育学・教育史と思想史の問題の共有という点で、喜ばしいことだ。昨年からだけに限っても、高橋敏『近代史のなかの教育』、竹内洋『日本の近代12　学歴貴族の栄光と挫折』、広田照幸『日本人のしつけは衰退したか―「教育」する「家族」のゆくえ』、といった教育史研究のニューウェーブとも言うべき、魅力ある研究成果が、主として歴史社会学、教育社会学の方面からなされ、我々に新鮮な刺激（と同時に新たな疑問）を与えている。辻本氏の本著もそうした一連の論議に、思想史・教育史から新たな視点を

提供するアプローチとして、併せて批評されるべきものであり、特に、近世思想を鏡として、近代公教育制度の欠陥、再生を言う（江戸時代の「学習文化」という「歴史の眼でいまを見ることで、ほかでは見えないものを「透視」する」一五頁、「「近代学校」から解放された視点で江戸時代を見る」五八頁）点で、独自の問題提起を行うものである。

本著の章立ては以下の通りである。

序章　「浸み込み型」と「教え込み型」
第一章　手習い塾（寺子屋）の学習
第二章　儒学の学習
第三章　貝原益軒の思想—近世学習論の思想的背景
第四章　貝原益軒の教育論
第五章　徒弟制と内弟子
第六章　現代の学校と学習文化

各章の内容の詳細を、ここにあらためて紹介することは避けるが、一応、著者自身によって簡明に整理された「序章」（一二〜一五頁）の言を用いて、あらかじめ議論の流れを確認しておきたい。

巻頭まず述べられるのが、「近代学校が普及する以前の時代において、日本人はいったいどのように学んでいたのだろうか。主に江戸時代のさまざまな学びの場と、そこにおける学びの実態、学習の方法を具体的に明らかにしていこう」とする観点からされる問題提起と江戸期教育をめぐる分析（第一章、第二章）であり、そこではもっぱら「手習い塾」の実相と、そこでの基本的教授法、「素読」学習の意義が説き明かされる。次いで、そうした「「浸み込み型」（私＝著者の言葉でいえば＜模倣と習熟＞）の学習文化は、日本の思想家たちによっていかに言説化され、どのような論理によって体系化されていたのか」という点から、近世前期の思想家、貝原益軒の思想言説が取り出され、分析、評価される。ここには比較的多くの紙幅がさかれ、貝原益軒の全体像が、その時代の思想言説の文脈上に浮き彫りにされる。氏の言を使えば、これまで多くなされた「近代以後のこまぎれに細分化された学問によって問題をうまく「語る」ための説明原理を、時をさかのぼって益軒のある一面に見いだそう」とする、近代の視野に規定された「一種のさかのぼり史観」では益軒の「学」の意味は明らかにならず、「彼の「知の現場」あるいは江戸時代の「知的空間」に戻って、その場で見なければ益軒の学の意味はとらえられない」として（九九頁）、益軒の「知」の特色が「気」論の背景からも含めて詳述される（第三章）。そして、それら益軒独特の「知」に即応したものとして、その教育論が、

「立志」「身体的な模倣と習熟の学習」「独学文化」「自己教育の文化」といった側面から、「浸み込み」教育の原型として提示され（第四章）、次いで、こうした「浸み込み」型教育の原理が、江戸期の思想家のみならず、「日本の広範な学習文化の文脈において、広がりと意味をになっていた」ことが、「職人」の「ワザ」によって、ならい、自得する教育・学習法をたどりつつ考察される（第五章）。最後に、現代の公文式教育に「自己学習」「浸み込み」型教育の存在を見、留保条件が付されながらではあるが、そこに一定の教育再生の可能性が見いだされようとしている（第六章）。

大きく本著の議論の流れをたどれば、以上のようになるだろう。そしてそれらを総括するテーマとして、日本に伝統的に流れるものとしての「浸み込み」型の学習文化が提示され、その現代における再生が説かれる。ところで、「浸み込み」型教育とは何か。本著の中で、それは絶えず語られるので、あえて言うまでもないが、その特色として著者によって提示されるのは、たとえば、「教える者」と「教えられる者」とが対峙しない教育、自立的・自発的学習が可能になる教育、「模倣と習熟」による身体的な修得による教育、といったことがらである。「素読」学習や益軒の教育法、職人の世界の教育伝統は、それぞれ個別的色彩は異なっても、そうした「浸み込み」型教育の姿を伝えるものとして、著者に指摘される。そしてこのことが、「教え込み」型近代の教育システムの中で疲弊する今日の教育に投げかける示唆は大きい、と著者は主張するのである。

■ 日本文化の「型」としての「学習文化」論とは

以上が、きわめて粗くまとめた本著の構造であるが、個別の記述に関して、評者が個人的関心から特に興味深く読んだのは、「素読」をめぐって展開する儒学教育、儒学「教養」の育成の場面であり、また「模倣と習熟」という自己学習課程のあり方が明快に解き明かされる箇所であった。

Ⅲ

前者についていえば、特に徂徠学における、テキストの「読みの革新」、「読書主義」と闇斎学派の「講釈」を背景に置きつつ、「素読」の新たな意味が説かれた部分、たとえば、

素読を通じて〈身体化されたテキスト〉は、それ自

体で直ちに実用の役に立つような知識ではない。しかしやがて実践的な体験を重ねるうちに、それらのさまざまな場面のうちに新たなリアリティーをもって実感され、よみがえってくる。いわば具体的な実践の場において実感的にテキストの意味が理解され、かつそれが道徳的な実践主体と、人としての生き方のうちに具体化されて示されるようなものである。経書というテトの〈身体化〉によって獲得される「儒学の知」とは、このような性質をもっていたと思われる。（七三～七四頁）

とされる指摘などは、評者にとってもまったく同感で、益軒の言説の詳細な分析とあわせて、「模倣と習熟」過程の内在的理解として、よく理解できることであった。本著はこうした、「自ら学ぶ」ことの意味を思想史上に説き明かすことにおいて、多くの示唆を与えるものである。

ところで私などが「素読」的学習に関心を持つのは、読書の方法、「知」の伝達の方法などを含めて、それが江戸期から明治期初期にかけての、儒学「知」そのものに、どのような変質をもたらしたか、また、それは近代国民国家の均質な「知」や、「教養」の形成にどこで通底し、どこで断絶しているのか、という関心からなのであるが、そうした関心から言えば、「素読」的学習は、儒学「知」の質的転換点を象徴する一指標として、歴史的転換の観点から捉えられる。もちろん本著も、氏がこれまで中心的な役割を担って明らかにしてきた、いわゆる「寛政異学の禁」以降の「公教育」発生論（前著『近世教育思想史の研究』一九九〇年）を基盤に展開されているのだが、本著においては、むしろ、日本の「学習文化」の原型、そこに「自己学習」的「学び」の諸要素が胚胎している原型として、提示される印象が強い。すなわち、「近代的教育」に対する、通時的な「日本の学習文化」の発現としての提示に、叙述の力点が置かれているようだ。それが本著の、世にアピールする点でもあるとともに、若干の疑問を抱かせるところでもある。たとえば、「寛政異学の禁」前後から広範に普及し、一定のテキストと公的な「読み」とが平行して流布する「素読」的慣習が思想史上に有した歴史的意味と、江戸前期に貝原益軒の学習論が持った意味とは、果たして一概に論じ得るのかといった疑問、そして、より大きなこととしては、「素読」学習―「益軒」の思想―「職人」の世界―「公文式」教育といったかたちで、時間空間を超えて、いわば反「近代教育」の根として、近世以降の日本に、文化的「原型」

が見いだされていくことの妥当性への疑問である（同じく、貝原益軒等を資料に取り上げて、「日本に内在する教育文化の型」をより強く論じた、源了圓氏の議論との接点と相違点は？）。

本著は、「江戸」を近代に抵抗する「モデル」として提示することに、きわめて慎重で、注意深くそれは避けられている。そのことは十分確認しておきたい。それゆえ、以上のような読みは、著者の意図しない部分も含むであろう。ただ、近代公教育の「教え込み」教育の反措定として、いくつかの事例から共通する「原型」のごときものが抽出されるとき、「学習者」中心の文化が、一種、反近代として理想化されたモデルに、読者に見えてくるのもまた事実である。本著とは大きく傾向を異にするが、わかりやすい批判的比較対象としてあえて挙げれば、高橋敏著『近代史のなかの教育』が、その顕著な例である。そこにおいては、近代日本のなかで見えなくなった「教育の原郷」を探す、という目的から、江戸期の村の習俗、小さな共同体内部での自発的な文字学習のあり方がいわば理想化され、それがいかに近代公教育の中で抑圧されていったかという図式が描かれるのだが、それは本当に妥当な議論なのだろうか。「近代教育の栄光の背後に広がる茫々と続く廃墟を前に非文字文化から文字文化への離陸と発展の中で抑圧され否定された民衆教育の地下水脈がおおいに気にかかる。教育習俗の子供の叫びはどこにいったのか。手習師匠の「餘力學文」や予めする教育の警告はどこに消えてしまったのか」（同書、二四八頁）といった語り口において近代批判が示されるとき、「文字文化」化を求めて「離陸」し、公教育への参加を求めて「国民」化していった人々が、その過程で抱え込むに至った問題を、真に自らの内部の問題として、内在的に、そこから批判され得るのであろうか。江戸や近代前を語りつつ、「近代」批判をなす際の困難な点がそこにはあるだろう（これは、評者にとっても難題であるのだが）。高橋氏の著と本著とは志向するところや議論の展開が異なるので、一様にはもちろん論じられないのだが、そうしたことが気にかかるのは、自発的学習、「ならう」習慣として、村の「しつけ」的世界や、小さな共同体内部の教育が、そこでは共に題材とされるからでもある。

高橋氏も着目する「予めする」教育に関して、著者は貝原益軒を引いて、その効を、以下のように言う。

益軒はここで、子どもが人間形成をとげる際の重要な原理を見出している、と私は考える。それは教育の可能性とか教育の無力さとかいった問題ではない。幼児期における子どもにおいて、目や耳によってなされる子ども自身の、「見ならひ、聞なら」ってそれに「似する」という過程、いわば子どもの〈模倣する力〉こそ、人間形成の決定的な要因である、という指摘である。われわれは、子どもが自力によってなす〈模倣する力〉という点を、益軒から読みとるべきである。はじめに模倣したものが、「くせ」になり、「心のあるじ」となって染みつくというのである。（一三五頁）。

ここに述べられる「模倣し、習熟する」自己学習能力については、異論はない。まさしく、その通りであろうし、我々もどこかで必ず体験したはずのことである。しかし同時に考えなければならないのは、そうした自発的「模倣・習熟」に根拠を与える外側の関係系、そうした学習・教育に無前提に認証を与え、「意味」を与える社会（権威の体系）そのもののことである。著者もしばしば述べるように、それは益軒の場合、「礼法」的世界であり、また「素読」学習に関して言えば、無前提に権威づけられ自明性が与えられた、儒教の「（それも特定の）経書」の世界である。益軒の示す「礼法」が今日から見て、いかに煩瑣なものであれ、そうした「作法」そのものの有意味性が疑われない地点に、益軒はいる。すなわち、そうした外側の大きな前提、自明性の承認があってこその「模倣・習熟」であるという点も、看過できない事実なのである。

益軒の「礼法」的世界に関して、著者は近代の柳田国男の「シツケ」論を引用している。「今ある学校の教育とは反対に、あたりまへのことは少しも教へずに、あたりまへで無いことを言ひ又は行つたときに、誠め又はさとすのが、シツケの法則だつたのである」という柳田の言を引き、著者は「ここでいう柳田の「シツケの法則」が、右に述べてきた益軒の教育の考え方と原理的に違わないことは明らかであろう。ただ、柳田のいう「しつけ」は、益軒において

は、「礼」として語られるものであった。益軒の「礼」の思想的な意味は、別に検討すべきことだが、要するに人間社会における、人の「他者」に対する正しい関わり方を意味する」（一四七～一四八頁）とするのだが、「シツケ」や「礼法」が有意味性を疑われず、自明的権威を保つ世界もまた、一つの抑圧的社会なのではないだろうか。そうした「あたりまへ」の自明性が疑われない社会システム、小さな共同体があっての「自己学習」ではなかったか、という思いがするのである。著者も自ら「儒学の学習は、近代学校とは異質な原理で行われていた。近代学校の学習の原理で近世儒学を理解しようとすること自体、すでにその異質性の自覚を見失ってしまったことを物語っている」（六〇頁）として、近世理解における、「異質性の自覚」の重要を言う。まさしく、「シツケ」「礼」「模倣と習熟」は、今日とは相当「異質な」社会システムの自明性「あたりまへ」の中で、相伴われてその完全形を保ったということもいえるのではないだろうか。

もちろん、著者は、そのようなことは十分承知の上で、そこから抽出される「模倣―習熟」型の自己学習の精神がいかにして再生され得るかを、考えようとしているのだろう。そして、そのことは、大いに魅力的である。が、同時に、現代の事例として示された、「公文式」の自己学習が、「受験競争に勝利する」というきわめて近代的価値を、親子共々自明のこととして有する下での、「自発性」であるように、それをいかに現代世界のなかに解き放つかは、なかなか困難な道であることも確かであろう。

辻本氏は、江戸を、いわば一つの「他者」として「近代教育」を相対化しようとする。そして「学校教育の肥大化は、近代公教育の制度が普及し徹底していった結果である。したがってどんなに長く見積もっても、歴史的にはたかだかここ一〇〇年に満たない」とし、「だからこの公教育の制度が自明のものだと考えたり、最高の教育のあり方だなどと思う必要はまったくない。今後も変わることなく永続すると考えたりすれば、それは錯覚にすぎない」（一七九頁）と言う。ここでの氏の主旨は、「近代公教育」から広く解放された「自学・自習社会」の可能性を言うことにあるだろう。そしてそのことは、冒頭にも引用して触れたように、全く首肯し得ることである。ただ、その「たかだか一〇〇年」こそが、我々を今も規定し続ける難題であり、そこの格闘からしか展望が開けないということも事実だろう。広田照幸氏は『日本人のしつけは衰退したか』の中で、近代前にあったとされる「家庭の教育力」は本当に衰退した

のか、「村のしつけ」は本当に幸福なものだったのかと問いかけ、それらが実は、過去を再構成する近代人の幻想であったことを言う。そうした過去の「物語り」を共有しつつ、「教育する家族」観念に近代人が呪縛されてきたことを、氏は言うのである。問題の根はやはりこの「近代」に多くあるというべきだろう。近代が獲得してきた「知・教養」の意味を正当に評価しつつ、その「知」を共有する制度として成立した「近代公教育」がいかに抑圧的制度と化してきたかが、内在的に批判されねばならないのだ。その際に「江戸」が一つの反照的世界として見いだされるのも事実である。しかし「江戸」もまた、一つの抑圧的社会でもある。そうした社会と有機的に結合して存した「学習社会」理念がそのままでは、新たな希望となり得ないことも明らかであろう。辻本氏の言う通り、我々はもはや、「学校」外にその再生、移植先を見いだす努力をすべき時期なのかもしれない。

教育学部に職を得、そこでの「常識」的な教育論議にどこか違和感を覚えつつ、自分にとって「教育」とは何かを模索する評者にとって、辻本氏の議論には多く教えられ、ものごとを考えさせられる貴重な契機を与えられた。記して謝したい。著者が本意としない方向での批評となった部分も多いと思われるが、評者にとっての課題の共有という意味で諒としていただければ、幸いである。

[文　献]

辻本雅史　『「学び」の復権―模倣と習熟』角川書店、一九九九年。
江森一郎　『「勉強」時代の幕開け―子どもと教師の近世史』平凡社、一九九〇年。
高橋　敏　『近代史のなかの教育』岩波書店、一九九九年。
竹内　洋　『日本の近代12　学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社、一九九九年。
広田照幸　『日本人のしつけは衰退したか―「教育する家族」の行方』講談社、一九九九年。
源　了圓　『教育学大全集Ⅰ　文化と人間形成』第一法規、一九八二年。
同　『型と日本文化』創文社、一九九二年。
河上亮一　『学校崩壊』草思社、一九九九年。